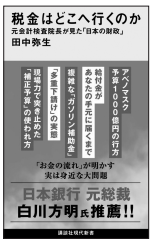
税金の活用法とともに
財政の未来を切り拓くヒントを学ぶ



『税金はどこへ行くのか
元会計検査院長が見た
「日本の財政」』
田中弥生 著
（講談社・1320円 税込）



渡部 晶 わたべ・あきら
1963年福島県平市（現・いわき市）生まれ。京都大学法学部卒。1987年大蔵省入省。財務省大臣官房地方課長、沖縄振興開発金融公庫副理事長、財務省財務総合政策研究所長などを歴任し、2024年7月退官。いわき応援大使、2024年3月放送大学大学院修士（学術）、日本政策投資銀行設備投資研究所上席主任研究員。

会計検査院長を2025年3月に退任した著者は在任中、「国民目線」の業務改革を推進し、会計検査院の長い歴史のなかに名を刻んだ。アメリカの会計検査院（GAO）は立法府に設置される機関であり、その長および副院長の任期は15年にもおよぶが、著者の任期はわずか1年3カ月しかなかった。これは非常に惜しまれることである。

さて、本書においてまず必読なのは第1章「7つの転職を経て会計検査院長へ」だ。著者はドラッカーに直接教えを受けた愛弟子であり、本書の底流にドラッカーの思想の原点「ひとりひとりが位置と役割を持つ自由な社会」の重要性があることを、自分のキャリア形成の歩みとあわせていきいきと述べている。

その後の構成は「第2章 会計検査院とはどんなところか」「第3章 税金はどう使われているのか①－アベノマスク・給付金」「第4章 税金はどう使われているのか②－補助金・補正予算・賃上げ税制」「第5章 会計検査結果はどのように活用されるのか」「第6章 会計検査院改革の挑戦－国民のために」「エピローグ－私たちは税金の使い方をどう判断するのか」「あとがき」となっている。

このなかで注目したいのは第3章・第4章であり、それぞれに記されている事例（検査報告の紹介）は具体的で実に説得力がある。と同時に、第5章でも言及されているように、税金はより効果的に活用されるべきではないかと感じさせる。たとえばこのような検査報告をもとに、国会議員が相互に自由に討議する時間を増やせば、国民にもより具体的に税金の活用法が伝わっていくのではないだろうか。また第6章を読めば、著者がいかに困難なことに果敢に挑戦し、検査報告時期の平準化という大きな業務改革を成し遂げたのかが伝わってくるし、その歩みには思わず感動を禁じ得ない。

一方で、本書がたびたび指摘する日本の政策における「実施」の脆弱さにも注目しなければならない。給付金の支給における巨額の委託費支出や自治体にかかる負荷は、まさにその典型例であり、これからの日本は政策の目的を明確にし、さまざまな課題をわかりやすく皆で共有して前進する必要があることが見えてくる。あらたな可能性を見出すための一冊である。